

ビルマの土はなぜ赤い

ウクライナへのロシアの侵攻で、日本への経済的な影響が徐々に出てきています。例えば小麦価格の高騰とか…。ウクライナには、有史以前に丈の長い草が何万年にもわたって、生えては枯れて腐食して土になるというプロセスを繰り返した結果、チェルノーゼムという非常に肥沃な（栄養分の多い）黒い土壌が分布していることから、世界的な小麦の産地になっています。ひまわりの栽培も盛んですね。

ロシアの大部分は冷帯気候の地域ですが、冷帯気候の地域にはポドゾルと呼ばれる土壌が広がっています。低温のために、樹木や草が枯れたあとの腐食に長い時間がかかり、養分が溶け出して灰白色になって酸性が強くなることから、あまり肥沃ではありません。そんなところでは、冷涼な気候と相まって、ジャガイモやライ麦、テンサイ（砂糖大根）などが主産物になります。それに比べて小麦がほとんど無肥料で栽培できるウクライナは、かつてソ連の穀倉地帯と言われていました。

そんなウクライナを戦車が蹂躪したのは、第2次世界大戦以来になります。ウクライナの東側のロシア内に、ボルゴグラードという都市があります。ボルガ川の河岸に発達した都市で、かつてソ連最大のトラクター工場がありました。トラクターの車台は、戦争時には戦車に改良できたことから、国内最大の戦車工場でもありました。そしてこの都市は、当時ソ連の共産党書記長として権力を握っていたスターリンの名前をとって、スターリングラードと呼ばれていたのです。

第2次世界大戦中のドイツとソ連の戦いの最大の激戦は、このスターリングラードの攻防戦だったと言われています。ウクライナを東に進んだドイツなど枢軸国軍は、最終的に瓦礫と化したスターリングラードの市街戦でソ連軍に敗れ、ウクライナの草原地帯を敗走します。現在のキエフをめぐる攻防戦がどのような結果になるのか、見通しはまったくわかりませんが、市街戦となれば相当に悲惨なことになるでしょう（今でも十分悲惨ですが）。

話はかわりますが、ソフィア・ローレン主演のイタリア映画「ひまわり」（1970年）の舞台（ロケ地）になったのもウクライナだと言われています。第2次世界大戦中ドイツ軍に従って参戦したイタリア軍の兵士としてソ連に行った夫が行方不明になり、戦後、夫を探しに行った女性が、ソ連内をあちこちさまよった末に偶然夫と再会し、広大なひまわり畑と原子力発電所を背景に語り合う場面はなかなか感動的ですよ。

さて、最後に映画と土壌に関してもう一つ。竹山道雄の「ビルマの豎琴」という小説があります。市川崑監督により2度映画化されていますが、新しい方（1985年）は、中井貴一さんが主演でした。観たことがある人もいないのではないでしょうか。第2次世界大戦中にビルマ（現在のミャンマー）で行方不明になった日本兵が、敗戦後日本に帰還途中の仲間たちに偶然出会いますが、その日本兵は僧侶になっていて、死んだ日本兵を弔うために一人ビルマに残るという話です。古い方（1956年）の映画を、私は中学校の蒸し暑い体育館の中で観ました。モノクロの映画でした。この映画の最後に「ビルマの土は赤い、岩もまた赤い」というテロップが流れ、これは兵士たちの流した血の色だということでした。

その後地理の教員になった私からすれば、ビルマは熱帯気候のところなので、降水量が多いために他の土壌成分が洗い流され、残った土の中の鉄やアルミニウムが酸化して、赤色土壌のラトソル（ラテライト）になっているから、ビルマの土は赤いのです。

なんだかロマンのかけらもない話になってしまいました。